

地域主体の持続的まちづくり活動の動向と特性 その2

－長野県の NPO 法人を対象として－

日大生産工(院) ○井出 綾香 日大生産工 北野 幸樹
日大生産工(研究員) 野田 りさ

1. はじめに

本研究は、既報「地域主体の持続的まちづくり活動の動向と特性－長野県の NPO 法人を対象として－」に引き続く一連の研究である。

地域主体の「まちづくり活動」に視座を置き、自発的なまちづくり活動が展開されている地方都市・長野県（人口密度：全国 38 位）を対象として、地域主体の持続的まちづくり活動に関する基礎的知見を得ることを目的とし、主にまちづくり活動の動向と特性について、活動の担い手である運営者並びに活動の主体である参加者の特性を整理し、他の組織との交流や協力関係について検討し、さらに定住意識や参加の実態・反応、活動意識について報告する。

2. 調査概要（図1, 表1）

調査対象地である長野県は77の市町村から構成され、10の広域地域（佐久、上田、諏訪、上伊那、南信州、木曽、松本、北アルプス、長野、北信）で構成されている。調査方法は前稿と同様であり、まちづくり^{注1}を中心に活動する NPO 法人を対象にアンケート調査（2017年5月～8月、2018年6月から7月）^{注2}を実施した。また、2017、2018年ともに回答を頂けた20組織の内7組織に現地にて直接聞き取るヒアリング調査（2019年5月）を実施した。

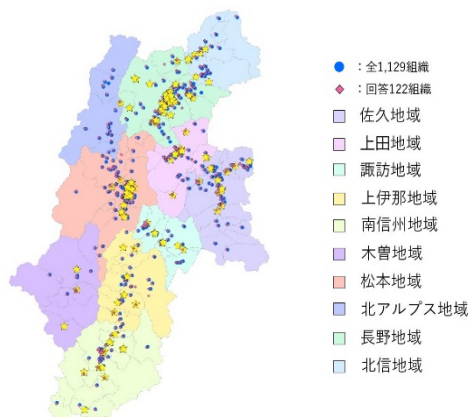


図1 調査概要

地域	佐久	上田	諏訪	上伊那	南信州	木曽
2017,2018 配布部数	140	104	82	89	95	22
回収部数	12	14	7	10	16	3
回収率	8.6%	13.5%	8.5%	11.2%	16.8%	13.6%
2019 調査組織	1/2	1/2	0/1	0/3	0/3	0/1
地域	松本	北アルプス	長野	北信	未分類	合計
2017,2018 配布部数	220	41	285	50	1	1129
回収部数	18	0	35	6	1	122
回収率	8.2%	0.0%	12.3%	12.0%	100.0%	10.8%
2019 調査組織	2/2	0/0	1/5	2/2	0/0	7/21

表1 調査概要

3. まちづくり活動の担い手である運営者（図2）

運営者に関して、「業種」「性別」「年齢」について整理した。運営者は「一般市民」の割合が最も高く84.9%、次いで「商工業者」5.8%、「農林漁業従事者」3.9%の順であった。全体では、男性68.2%、女性31.8%と男性の割合が高くなっている。年齢層で見ると、60～74歳の割合が高く、「一般市民」は、70～74歳が多く関わっている特性がみられる。組織の構成メンバーは50歳以上の「一般市民」の割合が高く、男性の割合が高いことが分かった。

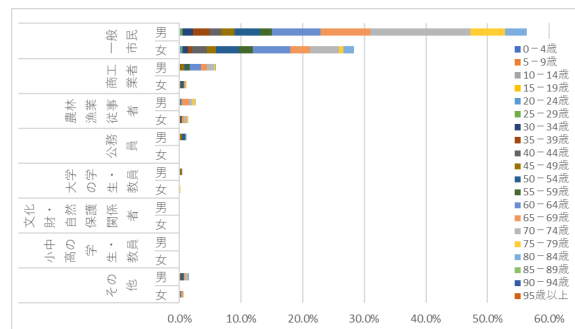


図2 運営者の構成（N=1113）

4. まちづくり活動の主体である参加者（図3）

参加者に関して、運営者と同様に「業種」「性別」「年齢」について整理した。「一般市民」が98.3%を占めている。全体では、男性68.9%、女性31.1%と男性の割合が高くなっている。年齢層で見ると、「一般市民」では10～14歳、40～44歳の割合が高く、幅広い年齢層が参加している実態がみられる。参加

者は若年層から高齢層まで幅広い年代の方が参加していることがわかり、地域内外から多くの方々が参加していることが分かった。

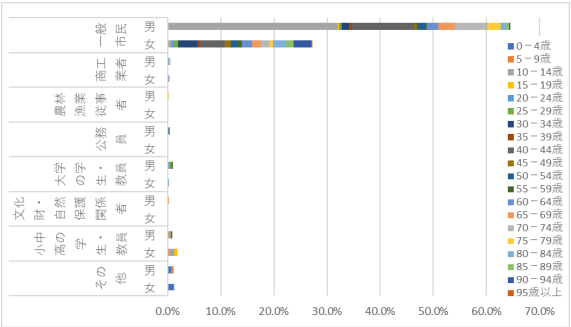


図 3 参加者の構成 (N=1597)

5. 他の組織との交流や協力 (図 4, 5, 14, 表 2)

アンケート調査で回答を得た 122 組織の内、68 組織が他の組織と交流や協力をを行い、約 6 割の組織で交流や協力の関係性を有している。他の組織と交流や協力が行っている組織は、長野県内における他の地域の組織に加えて、長野県外の組織とも交流・協力関係を築いており、長野市、松本市、上田市等の比較的人口の多い地域において交流・協力の関係が多くみられる。

また、ヒアリング調査で回答を得た 7 組織すべてが他組織と交流や協力の関係性を有していた。他の組織や団体と交流・協力関係にある目的については、当初の組織の目的を達成するためや、現在行っている活動の推進を図るため、観光客を対象に地域の観光地化を図り、地域に足を運ぶ観光客を増加させるために協力関係を築き、協働して地域活性化を行う目的等もみられた。類似の活動を行う組織と協力関係を作ることによって得られる情報や支援があるため、それをお互いに共有し、活動しやすくする効果もあると思われる。

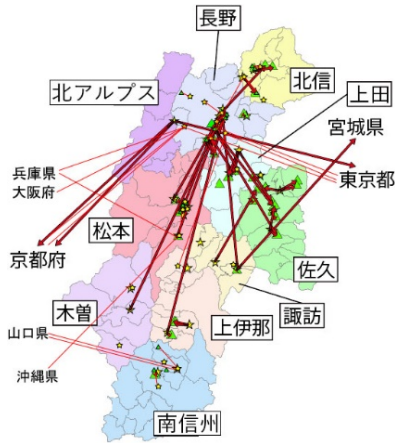


図 4 他の組織との交流や協力(2017,2018)

エリア	市町村	他の組織との交流・協力			エリア	市町村	他の組織との交流・協力		
		数	エリア	市町村			数	エリア	市町村
佐久	小諸市	1	不明		木曽	上松町	1	木曽	上松町
	御代田町	1	佐久	軽井沢町		木曽町	2	不明	
	佐久市	2	佐久	佐久市		南木曽町	1	木曽	南木曽町
	佐久穂町	1	佐久	佐久穂町		松本市	6	松本	松本市
上田	上田市	6	上小	上田市	松本	安曇野市	1	松本	安曇野市
	東御市	2	長野	千曲市		塩尻市	2	松本	塩尻市
	茅野市	2	上小	東御市		小川村	2	東京都	
	下諏訪町	1	不明			千曲市	4	長野	千曲市
諏訪	原村	1	大北	小谷村	長野	長野市	14	長野	長野市
	辰野町	1	不明			北信		北信	木島平村
	飯島町	1	上小	上田市		松本		松本	松本市
	駒ヶ根市	1	上伊那	駒ヶ根市		佐久		佐久	佐久穂町
上伊那	中川村	1	上伊那	飯島町	北信	飯山市	2	北信	飯山市
	飯田市	2	飯伊	飯田市		中野市	2	北信	中野市
	豊丘村	3	飯伊	喬木村		木島平村	1	北信	木島平村
	高森町	1	飯伊	高森町					

表 2 他の組織との交流や協力(2017, 2018)

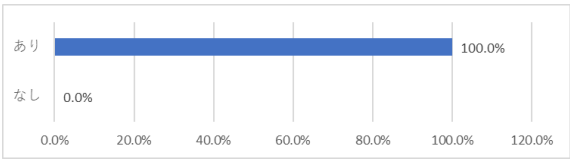


図 5 他の組織との交流や協力(2019)

6. 定住意識・参加実態・活動意識(図 6, 7, 8, 9, 10, 14)

アンケート調査における全ての回答者が現在の居住地に継続して居住したい意識があり、その理由として「親戚・友人・知人が多いから」「公園や自然環境があるから」など近隣との関係や環境が良好であることが挙げられた。また、地域で行われている活動に対して「時間があれば参加している」が 44.9%、「積極的に参加している」が 36.7%を占めている。活動意識をみると 8 割以上が活動に対して有意義であると意識しており、まちづくり活動の持続性に繋がる居住者意識が醸成されていると考えられる。

また、ヒアリング調査では、全ての組織が現在居住している地域に今後も居住すると回答した。居住理由は様々ではあるがどの組織も自然が豊かさや、利便性はないが近隣居住者にも恵まれ生活しやすい環境にあることが理由としてあげられた。また、「この地域を離れられない」や「ずっとこの地域で育ってきた」という意識が高く、居住する地域に愛着があることが伺える。

余暇活動については、家庭菜園や畑仕事等の活動が多く、次いでスポーツ関連であった。家庭菜園や畑仕事は、まちづくり活動の一環で実施する機会があったため、家庭(プライベート)でも育てるようになったことや居住する地域で生活するうえで必要になったため始め、楽しく続けているなどの意識があることが明らかになった。余暇活動の継続性については、71.4%の組織が「継続する」と回答した。



図6 定住意識 (N=47)

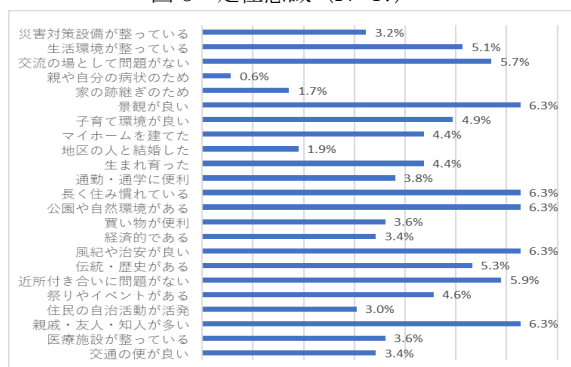


図7 定住理由 (N=526)

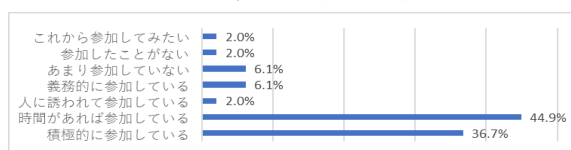


図8 参加状況 (N=49)

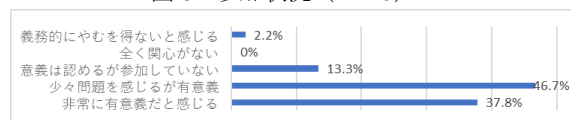


図9 活動意識 (N=45)

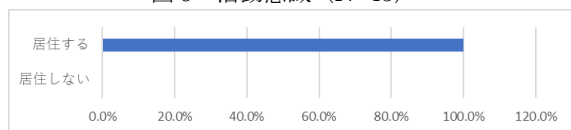


図10 居住性 (N=7)

7. 参加者の反応(図14)

ヒアリング調査結果から、活動に参加した参加者の反応は、運営者側の活動の結果に類似していると考えられる。回答を得られた組織の内容をみていても、事例Aは、セミナーや見学会を行うことでそこに訪れた人の暮らし方を見つめなおす機会を与えていた。事例Bでは、小さな児童は、先入観を持たずに障害児と交流することができ、そこから保護者同士の交流も生まれたと運営者が予想した通りの反応があった。また、農業体験では農協の方が携わることで地域居住者の方だけでなく、協同組合内でも障害児に対する理解が深まったと考えられる。事例Cは、大学の留学生と活動を行っており、活動に参加した留学生がSNSなどで活動について発信したり、活動を通して得た知識や地域の魅力をより深く感じたい、この地域で暮らしていきたいと感じる回答を得た。以上の結果以外にも参加者側の意識変化が多くあったという意見もあり、複数回、活動に参加し

たり、近隣居住者と一緒に参加する等活動の幅が広がっている。

8. 組織の継承理由・結果(図11, 12, 13, 14)

アンケート調査において、活動組織を継承していきたいと答えた組織が95.2%を占めた。その理由として活動に対して有意義であると84.5%の組織が回答していることから地域にとって組織の活動が必要であり、その活動を通して組織の存在意義を得られたことがわかる。

また、ヒアリング調査では、全ての組織が活動を行って良い結果が得られたと回答した。最も意識の高かった事例Aは、自分たちが実際に暮らしている古民家を一般の方に公開し、古民家での暮らしを実際に体験できるような活動や各地に出向いてセミナーを行っており、その結果として古民家に憧れを抱いていた方や余生を古民家で過ごしたい方などの関心が一層高まり、実際に古民家で生活を始めている。また、役所や地域新聞などで組織の活動が取り上げられてことで古民家の良さをセミナーや見学にきた方だけでなく、幅広い世代の地域居住者に広めることができたと思われる。次いで意識の高かった事例Cは、清掃活動や農業体験などを中心に活動しており、以前と比べてまちがきれいになり、活動を通して地域の方々との交流があったため活動を重ねるごとに活動中に地域居住者に声をかけてもらえることが多くなったという回答を得た。このような小さな交流から地域の輪が広がることで、地域・まちの持続性に寄与すると言えよう。また、大学の留学生と共に活動を行う機会があり、国内に留まらず、世界にまちの良さや楽しさを発信できていることもこの組織活動の果たす意義が大きいと考えられる。

以上の結果から活動を継続的に行うことにより、運営する側も参加する側も良い方向に意識が向いていると考えられる。また、活動の継続意思については、全ての組織が継続すると回答した。継続理由として、活動を行ったことで活動の参加者の反応をより近く感じられるようになったことや地域交流や組織同士の関係が深まったこと、組織が目的としていることを参加者に広められていることなどが挙げられた。

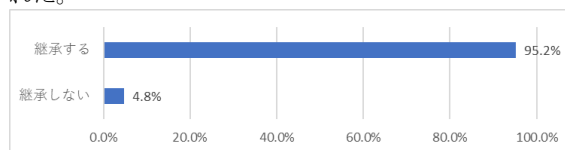


図11 活動の継承性 (2017・2018)

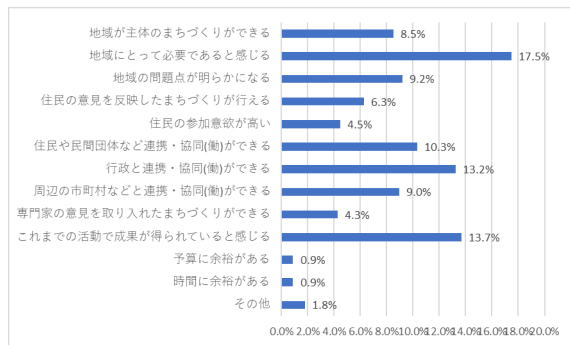


図 12 活動の継承理由

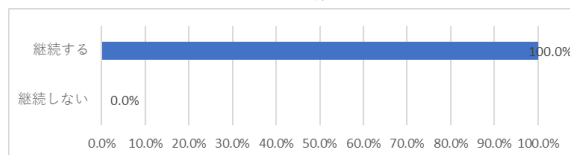


図 13 活動の継承性（2019）

9. まとめ

1) アンケート調査から得られた結果から、まちづくり活動の担い手である運営者においては、地域内に居住している高齢者を中心とした一般市民が組織の運営に関わっている特性がみられた。一方で、まちづくり活動の主体者である参加者においては、地域外に居住している若い世代の参加も多い特性がみられた。

2) 他の組織との交流や協力を行っている組織は全体の約 6 割を占め、その多くが長野県内外の組織と交流・協力関係を築いている。それらの組織は長野市のような都市部と連携している傾向がみられた。また、他の組織との交流や協力を 7 組織全てが行っており、当初の組織の目的を達成するため、かつ、活動をより活性化させるために協力関係にあることが分かり、地域で行われている活動や他組織との交流

を図ることで知識や経験を重ね、組織活動を持続させていく意思がみられた。

3) 運営者は継続して地域に居住したい高い意識を有しており、その定住意識の高さが活動への参加意識の高さと呼応して、活動への参加が有意義であると意識する活動意識の高さに繋がっていると考えられる。また、定住意識に関しては、長年、その地域で生活し、活動を行ったり、活動を行うために移住したことなどから地域に対する定住意識は高いと思われる。すべての組織が地域の自然の豊かさに触れており、不便な面もあるものの近隣との関係も良好であるため今後も現在居住する地域に居住していきたいと全ての組織から回答を得た。

4) 継承性については、地域にとって組織活動が必要であり、その活動を通して、組織の存在意義を得られたことや組織が目的としていることを参加者側に広められていることで、組織を継承していく意義を見出せたと感じる。

組織活動を持続させていくことで、周辺地域だけでなく、長野県内や県外にも影響し、まち自体の活性化につながっていくと考えられる。

今後は引き続き、本調査で得られた運営者のまちづくり活動に対する意識の側面から整理し、地域主体のまちづくり活動の持続性について検証を深めたいと考える。

注

注 1) 参考文献 1) の「特定非営利活動法人の活動分野について」において、「まちづくり」に該当する NPO 法人を抽出している。

注 2) 主なアンケート調査項目は以下の通りである。

主なアンケート調査項目	
①活動組織について	活動拠点、組織特性等
②運営者について	属性（一般市民、事業従事者・行政・専門家等）、性別、年齢、居住地（地域内・外）、居住年数、構成人数等
③活動内容について	活動名、活動内容、活動分野、活動場所、活動期間、活動頻度、活動時間等
④参加者について	属性（一般市民、事業従事者・行政・専門家等）、性別、年齢、居住地（地域内・外）、居住年数、構成人数等
⑤運営者の意識について	参加者の参加理由、活動目的、活動を行った後の活動意識、活動の継承（目的・意識・理由）等

意識	協働で行っている活動の目的	居住性	余暇活動のきっかけ	参加者の反応	活動の継続性
高い	「町を活動し、地域の生活をより良いものにした。」 事例 F 「古民家を広めるため。」 事例 A 「観光客を増やす。」 事例 G 「伝統伝承、情報共有。」 事例 E	「この地域を離れられない。東京に行くのが難しい。ここよりもアスファルトが多いから車を使わずに、歩いて歩くのは生きている感じがした。」 事例 D 「目的が置か、結果も必ずしも満足はしていない。でも住むのはいい。周りの子供もあまら出てきたがらない。出て行っても戻ってくる人が多い。東京に帰る方もいます。がターン率は高い。」 事例 I 「活動を続けたいから。」 事例 B 「生まれたのも地元市だし、市町村合併したから地元市になったの。みんなは旧市町村だから。」 事例 E 「結婚しての地域も知入っていて、そんなに便利な所ではないけど人だとか。」 事例 C	「もともと習いは無かったが学生時代からサークルでやってたところからの延長。」 事例 B A：全然花とかわかんないし、知らなかったけど活動で知ることになって、家で小さめの物を買ったりして、寄せ植えするようになった。家にちょっと花があると癒しにもなる。B：育てる経験が少し増えたこととか、やっぱり自分で作ったものには愛着があって、毎週全然違うと思う。」 事例 C 「移住してから、やるつもりはなかったが生活するうえで必要なことなのではじめて面白くはなりました。」 事例 A 「娘がバレーボールを始めた。」 事例 E	「実際に古民家に居住し、生活している様子を見て、古民家で暮らすことを諦めとまっていた方や老後の生活の 1 つの選択肢として考える人が多くなった。」 事例 A 「小さい子は先入観がないので軽微な知的障がいのお子さんと一緒に遊んでくれることができた。収容施設は偏見の偏見のところにも来ていただき、地域にこのような人もいいるということを理解してもらった。」 事例 B 「職業体験では、MANABI 外国語学院と一緒にやっている。参加者は 100 人くらいいるがみんな喜んで楽しくやっている。その卒業生がここに定住して上田で働いたり、進学したりしている。上田の魅力をわかってもらえて、ここに住みたいと思ってくれている組織かもしれない。」 事例 C 「一生懸命働こうという意識が芽生えてきている。」 事例 E 「親子の広場に登って山を見たら非常に清々しく、今までのちょっとした気持ちの切り替えがいろいろアンケートも書いてもらえて、非常に良かった。」 事例 D 「家らしくやっている。何事も足運んでくれる方が多い。」 事例 F 「地元の若い人たちが応援してくれている。」 事例 G	「古民家を広め、継続させたい。住み難いのでいい。」 事例 A 「地元の方の満足がある。」 事例 F 「維持費をしないといふ山も必要。もすぐにダメになってしまうから未来を担うためにいい。」 事例 D
低い					

図 14 組織の意識関係